

【論 文】

初級日本語文法の動詞項目について⁽¹⁾

藤 戸 淑 子

1. 序

外国語としての日本語の文法は、その取り扱う項目の選定と規則性の与え方において、国語教育における学校文法とは異なる点が多い。国語教育では、学習者が日本語の運用能力を既に相当程度習得していることを前提とし、文法という枠組を適用して既習の日本語を確認することが目標の一つとなっているが、既に母国語を持つ学習者に機能的な日本語を一から習得させることを目指している日本語教育では、文法を、未習の言語に何らかの規則性を持たせ、系統的に学習させるための規準と考えている。従って、日本語文法と学校文法あるいは国文法が、取り扱うのは同じ日本語でありながら構成面で相違するのは当然であろう。

初級レベルの日本語文法では、基本的な文法事項を網羅的に扱おうとするために、国語の文法との差は更に広がっている。又、国文法がいくつかの系統に分かれるのと同じく、日本語文法も色々に分類が可能で、現在使われている日本語教科書は一冊一冊が独自の試みの成果と言えよう。しかし、教科書間の違いは扱う文法事項の種類と量、各事項の適用範囲、提示順序及び、提示方法の違いによるのであり、現行の教科書の編集者達が初級レベルの必修文法事項と見做しているものには極端な差は見られない。⁽²⁾

本稿では、基本的な文法事項の中から動詞に焦点をあてて、動詞の分類を活用形の観点から述べたあと、初級で教えたらいと思われる事項を取り上げ、それらを外国語としての日本語教育でどのように扱ったらよいかについて、活用形ごとにまとめて述べる。

2. 動詞の活用形式による分類

学校文法では、動詞をその活用形によって五段、上一段、下一段、カ行変格、サ行変格の5群に分ける。日本語文法では上一段と下一段を1群にまとめ、カ変サ変を不規則動詞として一緒にし、五段動詞はそのまま1群とする3群に分けるのが一般的である。3つの動詞群の名称は教科書によって色々工夫されている。五段活用動詞を第1グループ、上一段下一段を第2グループと呼ぶものが多い。⁽³⁾ これらの動詞を語幹の最終音によって vowel verb、consonant verb と呼んだり、⁽⁴⁾ 終止形の語尾によって u-verb、ru-verb と名付けたりもしている。⁽⁵⁾ 又、活用上変化する部分の多い五段動詞を強い活用をする動詞として strong verb、終止形語尾のだけが色々な助動詞等と置きかえられるものを弱い活用をする動詞と考え、weak verb と呼ぶものや、⁽⁶⁾ godan, ichidan と、そのまま使っているものもある。⁽⁷⁾ これらのうち、佐久間鼎の「強変化・弱変化」⁽⁸⁾ を踏襲したと思われる strong verb、weak verb は、外国人学習者に活用の手順の多さを強弱という質的違いに置きかえて考えさせようとするものであり、ゴダン、イチダンという名称も、机、田中、元気な、三本など、出てくる語全てが新出語彙という状況にある初級学習者には、余計な負担となる用語であろう。u・ru-verbs と consonant・vowel verbs という名称はローマ字表記を用いる場合にしか使えず、表記だけでなく発音上も問題のあるローマ字の回避、あるいは、早い段階でローマ字離れをめざす場合に不都合である。最も中立的な第1群第2群と不規則動詞（あるいは第3群）とするのが一番扱いやすいであろう。

第1群動詞は終止形の語尾によって、買う、待つ、走るのように一う、一つ、一るで終わるもの、遊ぶ、読む、死ぬのように一ぶ、一む、一ぬ、で終わるもの、一くで終わるもの（書く）、一ぐで終わるもの（急ぐ）、一すで終わるもの（話す）の5つに下位分類をする。この分類は、次章で取り上げる連用音便形に助詞て・での付いた形を作るのに必要となる。

五段動詞のうち、なさる、いらっしゃる、おっしゃる、くださる、ござ

るは、連用形が一り(ます)ではなく一い(ます)となるが、Jordan のように aru-group として独立させる例と、第1群動詞の中の特殊な活用をする例外語扱いにしている場合がある。現代日本語では、この活用型をもつのはこれら5語に限られており、又、その特殊な活用型も連用形だけなので、別な動詞群をたてる必要はないと思う。

上一段下一段の第2群動詞については、活用上全く差異がないので下位分類はいらない。

第3群の変格活用動詞はくる・するの2語だけである。するの活用が出来れば、勉強する、買物する等のする動詞が全て使えるようになる。

日本語の動詞では、不規則動詞2語及び第1群の -aru 動詞5語のほかは、行くを除いて、全く規則的に活用する。行くの場合も、不規則な部分というのは、連用音便形が行ってになるだけで、あとは歩く他一くで終わる動詞と全く同じ活用であり、規則的に活用する日本語動詞の中で唯一の例外とも言えよう。

次に、学習者からよく尋ねられる第1、第2群動詞の見分け方について述べる。原則的には、大部分の動詞は辞書形で第1群か第2群かの見分けがつく。くる・するを除いて考えると、る以外の音で終わる動詞は全て第1群である。又、るで終わる動詞のうちア・ウ・オ段の音がるの直前に来るもの(わかる、作る、取る等)は第1群である。分類上問題が起きるのはイ・エ段+るで終わる動詞であるが、これらは意味・形の上からも見分ける方法はない。ただし、イ・エ段+るで第1群に属する動詞はその数があまり多くはなく、特に初級レベルの語彙として扱われるものは10語余りと限られている。学習者には、入る、走る、要る、知る、切る、参る、にぎる、帰る、滑る、しゃべる等が第1群に属するイ・エ段+る動詞であることを新出時点で指摘し、指摘のない語は第2群に属すると教えておけばよい。⁽⁹⁾

現代日本語の動詞は、活用形によって、以上のように不規則動詞2語の他は2種に分類できる。これに対し、英語では動詞を規則的に変化するも

のとして捉え、不規則動詞については、活用を見出し語・発音の次に記し、更に一般の英和辞典等では英語の不規則動詞表を別掲している。英語の不規則動詞は無変化のものも含め、形が色々であり、数も多く、⁽¹⁰⁾ 規則的に活用する動詞に対して、別の動詞群を成すと考えてもよいと思う。学習者の負担という点から見ると、第1群第2群の活用規則を習得すればよいのであるから、日本語動詞の分類の方が合理的で、外国語としても分かり易いのではないか。

3. 動詞の活用形とその応用文型

3.1. 日本語を母国語とする者は、学校文法で未然・連用・終止・連体・假定・命令という6活用形を習ってきている。学校文法の動詞活用表の問題点に関しては様々に議論されてきている。⁽¹¹⁾ 又、従来の五十音図に即した活用表に代わるものも提案されてきたが、⁽¹²⁾ 日本語を外国語として教えるのには、これらの表も使いやすいとは言い難い。各活用形の用途を考えた場合、6活用形の名称が用法習得の妨げとなりかねない。

次に、英語などでは、動詞の活用形は語として一応最小意味単位を成すのに対し、日本語では、歩くの未然形歩かや、食べるの假定形食べれば自立語となり得ず、これだけを活用形として覚えても、学習者はこれらの語を駆使できるようにはならない。第三の問題点は、日常の会話で使用頻度の高い語形が、終止形以外は活用形として取り上げられていないことである。一番目立つのは連用音便形+接続助詞て・で(書いて、読んで等)の欠けていることである。この通称て形(te-form)を日本人がどれ程多くの場面で使うかは、各人が自分の一日の使用文型を振り返ってみるとよく分かるだろうし、用途が同様に多い終止形と同レベルで扱った方が有効なことも、容易に予測できよう。

日本語の教科書の大半は、未然形などを含む6活用形という概念を用いていない。しかし、動詞の活用形を一覧表にして掲げている教科書を見ると、英文説明のあるものでは、non-past、past、conditional、provisional、

gerund (夫々歩く、歩いた、歩いたら、歩けば、歩いてを指す)⁽¹³⁾ や、dictionary form、conjunctive form、imperative form (夫々歩く、歩き、歩けを指す)⁽¹⁴⁾ 等、その代表的用法を表す最も近い英語を当てはめたり、ない-form、ます-form、dictionary form、ば-form、intentional form (夫々歩か、歩き、歩く、歩こを指す) のように、英語による有意味の名称と、付加し得る助詞又は助動詞の主なものを冠した、無意味語と言っている名称を併用している教科書もある。⁽¹⁵⁾ 英語の名称は用途を限定させてしまう恐れがある。past と呼ばれる行ったは「今度東京へ行ったとき、その店に寄ってみます」では、when I went to Tokyo ではなく、when I go to Tokyo next time となり、未来の事柄を指している。又、non-past についても同様である。「日本へ来るとき、このかばんを買いました」は when I came to Japan と過去の行為を指していることは言うまでもない。これらの行ったと来るは、主節・従属節にかかわらず夫々の動作の完了・未完了を表すのであって、時制とは直接には関係がない、という大事な概念の定着が妨げられかねない。又、連用音便形+て・では英語の gerund の用法と異った独自の用法のある語形であり、学習者が英文法に精通していると一層誤解の生じやすい用語である。

これらの活用形を作るにあたり、英文の文法解説がある教科書の多くが stem という用語を使っているが、その意味するところは一律ではない。第2群(上一段下一段)動詞は食べ・起きが stem と呼ばれているが、第1群(五段)動詞については、書くの kak- を stem とするものと kaki を stem と呼ぶものに分かれてる。⁽¹⁶⁾ 更に、後者の中には kaki を stem と呼ぶ一方で、kak- に base form という用語を用いているのである。⁽¹⁷⁾ しかし、stem, base, root 等の用語を日本語に応用する場合、例えば、英語の動詞における stem と、日本語動詞の stem 相当部分の認定のしかたが、全く同じではあり得ず、用語だけを借用するのは適当ではない。事態を更に複雑にしているのは、学校文法での語幹という用語である。学校文法では一段動詞の起きる・食べるの語幹を夫々お・たとし、き・べを活用部分

に含めているが、見る・着るはみ・きを括弧に入れて語幹欄に記すという不自然さが生じている。⁽¹⁸⁾

書くの stem を kak- と認定することには別の問題もある。先ず、日本語ではかを一音として捉えており、音声学的には/k/と/a/に分けられるが、日本語の音韻としては/ka/が最小単位だと考えるべきであろう。表記上も問題がある。ローマ字を用いぬ限り kak-anai、-i (masu)、-u、-eba のような語尾変化は書き表せない。速習用のコースを除いては、仮名表記を初めから、若しくは、なるべく早い段階で導入するのが望ましいと考えられている現在、ローマ字表記に頼らなければならないような動詞活用表は不便かつ不適當である。⁽¹⁹⁾

3.2. 以上述べてきたような、日本語動詞の活用を教えるに当たっての様々な問題を処理するには、次のような点を考慮に入れた活用体系を作ればよいだろう：(1)動詞の語尾を変化させて得られた形を、活用形としてではなく、base (基本部分・語基) として認定し、それらに助詞又は助動詞が付いて、何らかの意味を持つ最小単位として成立するものを、「～形」と名付けられる語形 (form) とする。(2)前項の base の認定に当たっては、未然形以下の6活用形にとらわれず、日本語の動詞の変化形を各種の動詞文型に応用するのに、最も都合のいい形を活用表に採り入れる。その際、文法上の統一を図るために実際面での利点を犠牲にしない。(3)名称で用途について先入観を与えたり、应用能力を限定したりせぬよう、なるべく無色で中立の名称を各語基 (base) 及び語形 (form) に与える。(4)変化形は仮名表記が可能なものにする。

動詞の活用を教える時に、どんな活用表を用いるか、教える側に選択の余地のある場合と、使用する教科書の活用表に従わざるを得ない場合とがあろうが、根本的には同じ事柄を扱うのであり、動詞活用の基本的概念を誤まらずに具現したものであれば応用が可能なはずである。上述の各点に配慮すると次のような特徴を持つ案が考えられる：(1)動詞を活用させて

得られる変化形の基本部分を7つとし、それらを、Base I (第I形)、Base II (第II形) 以下 Base VII (第VII形) までとする。書くを例にとると、Base I : 書か、Base II : 書き、Base III : 書く、Base IV : 書け、Base V : 書こう、Base VI : 書いて、Base VII : 書いたとなる。(2)以上の基本部分7形に、中立の呼び方があれば付けてもかまわない。例えば Base III は辞書形、Base VI と Base VII は夫々て形、た形とよんでもよい。(3) Base I はない形や受身形、使役形を作るための基本部分、Base II はます形や願望を表すたい形のための基本部分として学習者に理解させ、Base に何かを付加して意味のある語形 (form) あるいは文型 (sentence pattern) を増やしていくのだ、という捉え方をさせる。

これらの基本7形は夫々従来の未然形、連用形、終止形、假定形、未然第2形の5形のほかに、連用音便形+て・でと連用音便形+た・だを加えて出来ている。形の上で全く終止形と変わらぬ連体形は除いた。命令形を外したのは、第1群動詞は Base IV がそのまま命令形として使えるし、第2群動詞は Base IV にろ又はよを付ければよく、応用になじまぬ語形は base としての条件に欠けるからである。他方、語形変化のない助詞う・ように連らなる未然第2形を所謂意向形 (volitional form、intentional form等と呼ばれている) の形で Base V としたのは、第1群動詞がア～オ5段全部を实际需要とすることを示すため、又、書こ・食べの形にしても、このままで使う用法は無く、しかも後に付加出来るのはう・ようだけであること、そして、「…と思う／考える」等の文型や、「Base II + ましょう」の普通体として日常会話でもよく使われる語形だからである。Base VI : て形、Base VII : た形は、その都度連用音便形から派生させるには、この2形を要求する文型が日常の会話に頻出し、別個の語基とした方が動詞文型の習得に効果的だと思われるので、基本の7形の中に組み入れた。⁽²⁰⁾

3.3. 動詞の基本7形と、それらを使用する文型などのうち、初級レ

ベルで扱われると思われるものについて解説を試みる。

初級レベルの文型・文法項目の認定に当たっては、*Japanese for Today* で提示されている文法項目を基準とした。⁽²¹⁾ その根拠は、最近発表された論評でも指摘されているように、学習事項が他の汎用されている教科書より多いことと、⁽²²⁾ 媒介言語による文法解説があって、提示された事項の応用範囲に関して編集者の意図がほぼ汲み取れるからである。

本稿で取り上げる動詞の基本7形は、最小意味単位を作るための基本部分（語基）を成すものであり、日本文の中で使われた場合、常に単独で意味を成すとは限らない。Bases III、V、VI、VIIのように、それだけで意味をなし得る用法があっても、独立した最小意味単位とは認めず、その構成要素と考えたい。

最小意味単位を作るためには、これらの基本部分・語基に、国文法で言う助動詞や助詞を付けたらよい場合が多く、日本語文法ではこうして得られた語形を「～形」と呼んでいる。学校文法ではこの助動詞部分を取り出し、打消のない、推量、意志のよう、使役のせる等と呼んで活用させている。しかし、実際には、助動詞は活用はあるものの、このような意味を有する独立の語ではなく、他の用言や体言に付けられて推量や使役の意味をそれらの語に付加する機能を持つ、と考える方が合理的なように思う。従って、国文法で一品詞として扱われ、活用形も無変化を含めて5種類もある助動詞を、日本語では品詞分類の中に入れていないのが普通である。むしろ、助動詞が付加された書きたい・見ます等を夫々たい形・ます形と呼び、書きたい、書きたくない、書きたかった、書きたくなかったや、見ます、見ません、見ました、見ませんでしたというように変化形を教えるのである。（以下の記述では助動詞という用語を使うが、解説のために使うのであって、初級学習者にこれらの文法事項を導入する時に使うものではないことを、予め断っておきたい。）

3.3.1. Base I

(1)打消しの助動詞ないを付けてない形を作る。否定形普通体 (plain

negative) であり、た形を持ち、書かない、書かなかったとなる。第3群動詞くるはこない、するはしないとなる。

(2)ない形は「一たほうがいい」の否定文型として「書かないほうがいい」となる。過去の事実を反した想定を表す「書かなかったほうがよかった (It would have been better if you hadn't written⁽²³⁾)」も教えてもよい。

(3)動詞ない形ので形は、2文接続に使える。

(4)ない形は「一なくてもいい」という譲歩文型 (concession) を作る。この文型は「一てもいい」文型と対になる。

(5)ない形は条件の形になって「一なければならない」という義務を表す文型を作る。

(6)ない形+接続動詞では without doing~, instead of doing~ の意味を表す書かないで・見ないでという形を作る。

(7)Base I + 助動詞れる・られるは受身を表す書かれる・見られるという語形を作る。受身形は第2群動詞と同じ活用をする。

(8)Base I + 助動詞せる・させるは書かせる・見させるという使役形を作る。使役形は第2群動詞型の活用をする。

(9)使役形に、第2群動詞に付く受身助動詞られるを付加して、書かせられる・見させられるという使役受身形を作ることができる。この形も第2群動詞型活用をする。

3.3.2. Base II

(1)Base II のままで2文をつなぐ。(例：手紙を書き、封筒に入れた。) 時制は後に来る節の時制で決定される。2文接続機能のために、conjunctive form と呼ばれることもある。

(2)助動詞ますを付けて動詞の丁寧体を作る。書きます・見ますの形は、現在作られている教科書の殆ど全部が、最初に導入する動詞の語形である。一ます、一ません、一ました、一ませんでしたと変化する。

(3)助動詞ますの変化形ましょうを付けて、提案・誘いを表す。書きましょ

うは学校文法ではますの活用形の一つとして扱われるが、学習者にとっては意味が分かりやすく使用頻度の高い形なので、大半の教科書では独立項目として扱っている。

(4)希望を表す助動詞たいが付いて書きたい・見たいという語形を作る。たいは形容詞活用形であるから、丁寧に言う場合は丁寧の断定の助動詞ですを付加する。一たい、一たくない、一たかった、一たくなかった(丁寧体は夫々にですが付く)と変化する。

一たいですの言い切りの形は話者の希望を表し、一たいですかで相手の希望を問うことができるが、第三者の希望について述べる時には接尾語がるを付けて見たがるとするか「見たいと言っている」と引用文型にして使うのが一般的である。

(5)接続助詞ながらが付いて、二つの動作が同時に起こっていることを表す。時制の影響は受けない。(例：コーヒーを飲みながら、本を読んだ。)又、「手帳に書いておきながら、約束を忘れてしまった」のような「～にもかかわらず (even though、although)」の意味を表す場合もある。

(6)なさいませの省略形であるなさいを付けて、丁寧な命令表現を作る。但し、この表現形式は「おかえりなさい」や「おやすみなさい」等の決まった語句以外は、使う時が限られている。先生が生徒に指示を与えたり、親が子に指示する場合、又は、警察官が命令や指示を出す場合等に使われるのであり、成人どうしでは、高圧的に話そうとするのでない限り、依頼表現「一てください」が代用されることが多い。Base II + なさいは試験の設問など、文書には使われている。

(7)助動詞そうだが付いて「そういう様子だ、そうなる様子だ、そうする様子だ (seem to do/be、look like)」という様態を表す。丁寧体はそうですである。

(8)他の動詞が付いて合成動詞を作る場合、前に来る動詞はBase II形になる。(例：書き始める、見終わる)

(9)形容詞の前に付いて合成形容詞を作る時、動詞はBase II形にされる。

(例：書きやすい、むし暑い)

(10)合成名詞を作る場合も動詞はBase II形にする。(例：書き方、話し言葉、聞き手、山登り、東京行き、拾い読み、立ち見)

(11)動詞によってはBase IIがそのまま名詞として使える。(例：泳ぎ、帰り、疲れ)

(12)Base IIは、上記(11)のように独立した語としては使えなくても、助詞にを付けて往来の目的を表す場合には、どんな動詞でも文脈に合えば名詞相当語として使える。「買いに行く、食べに帰る」の買い・食べはこれだけでは独立語ではない。Base IIのこの用法は「一に行く／来る／帰る等」文型に限ることを注意しておかないと、I like to buy things, I like shopping のつमोरの「買いがすきです」というような誤用例が生じる。

(13)尊敬を表す文型お+Base II+になるで使われる。(例：お書きになります)

(14)謙譲を表す文型お+Base II+するで使われる。(例：お持ちします)

3.3.3. Base III (辞書形)

(1)未完了の動作あるいは習慣的行為を表す、動詞普通体の言い切りの形である。書く・書かない (Base I)、書いた (Base VII)、書かなかったと変化する。

初級レベルの学習者にとって、Base III辞書形で文を完成させる形の習得は、日常会話で普通体が駆使できるようになるのが第一目的ではなく、一と思ひます、一と言っていました、一と書いてありますのような引用表現及び連体修飾を使いこなすための下準備と考えた方がよい。

(2)断定の助動詞です・だの未然形に推量の助動詞うの付いたでしよう・だろうが付くと、可能性 (possibility) を推量する文型になる。(例：書くでしよう〔丁寧体〕、書くだろう〔普通体〕)

(3)時・前など時間を表す形式名詞に付いて時の従属節を作る。主節述部の時制の影響は受けず、(1)で述べたように、単に主節の事柄が生じた時点において従属節のBase IIIで表されている動作の完了していないことを表

すだけである。(例：手紙を書く前にコーヒーを飲んだ。テレビを見る時
めがねをかけます。)

(4)Base III+とは条件節を作る。後述する BaseIV+ば、Base VII+らと条
件節を作るという点ではよく似ており、3文型の間でかなりの互換性はあ
るが、一と条件節は次のような特徴を持つ：①ある条件・原因の結果がご
く自然に予想され得ること、即ち、ことの成り行き上予測される通例の結
果を表すような因果関係文に使われる。(例：冬になると毎日雪が降る。
その角を曲がると銀行が見えます。)②主節が話者の意志(判断、意見、
命令、依頼等を含む)を表す場合には使わない。「来週雪が降るとスキー
に行きたい」や「リーさんに会うとよろしく言って下さい」は誤用である。
③主節が過去だと、思いがけない結果を表す場合と、過去の習慣を表す文
になる場合がある。(例：目をさますと外は大雪でした。週末になるとド
ライブに出かけた。)

(5)格助詞のが付いて連体修飾節を作る。(例：朝早く起きるのは苦手で
す。)

(6)形式名詞ことを伴って連体修飾節を作る。(例：来週試験があること
を知らなかった。)ことを使った連体修飾節のうち、次のような用法の文
型は取り出して教える：①Base III+ことができる(例：書くことができる)
②Base III+ことがある(例：英語で書くことがある)③Base III+こ
とにする(例：明日書くことにする)④Base III+ことになる(例：日本
で勉強することになった)。

(7)Base III+助動詞そうだ文型は、話者が自分で直接確かめたのではな
い情報を表す。伝聞の出所は書かれたもの、人からの話、報道機関等何で
もよい。学習者はこの伝聞文型と既述の様態文型(3.3.2.(7))を混同
させやすい。事実認定を明確に行わないことで両文型は共通しており、第
2群動詞は語尾るの有無で違いがはっきりする(例：食べそうだ、食べる
そうだ)が、第1群動詞はイ・ウ段の違いだけで間違いやすい(例：降り
そうだ、降るそうだ)

(8)Base III + ようだは不確かな断定を表す文型である。ようだはように・ようとなつて、たとえば言う場合や例を挙げて言うのに使われる。(例：誰か来るようだ。コンサート・ホールで聞くようにきれいな音だ。タイプで打つようにきれいには出来ない。)

(9)Base III + らしいは推定を表す。(例：彼は来年論文を書くらしい。)

(10)Base IIIはこのほか、つもり、はず、わけ、ため(に)、ところ、とおり等、色々な形式名詞を伴って日常会話に便利な文型を作る。取り上げられる文型は教科書によって異なる。

3. 3. 4. Base IV

(1)動詞可能形は五段動詞と上一段下一段動詞共に、未然形に可能の助動詞れる(五段動詞に)・られる(一段動詞に)を付けて作るのであるが、現在では五段、即ち第1群動詞は書かれるより、下一段に活用させて作る可能動詞書けるの方が一般的である。可能動詞が作れるのは第1群動詞だけで、第2群動詞にはられるを使う形しかない。即ち、第1群動詞Base IV + る、第2群動詞Base IV + られるで「出来る」という意味の加わった語形が得られる。可能形書ける・見られるは下一段活用をする。そして、他動詞の場合には、目的語に付く助詞ををがに変えるのが一般的である。⁽²⁴⁾

(2)Base IV + 助詞ばは条件を表す形である。日本語には条件節を作るための文型がいくつかあり、これもその一つであるが、主に次のような条件節に使われる：①条件と結果の因果関係が一般的に可能であるか、繰り返して生じ得る場合(例：天気がよければここから富士山が見える。)②普遍的事実や習慣等を表す場合で、格言、諺、道理などもこの場合に含まれる。(例：ピアノは毎日練習すれば上手になります。住めば都。)しかし、ある特定の原因と結果、即ち1回きりの原因・結果の場合には使わない。「地図を見ればわかりました」は通常使わない。「地図を見たらわかりました」⁽²⁵⁾が普通である。

又、Base IV + ば + Base IV + ほどという the more~, the more~に相当する文を作るのに使われる。(例：考えれば考えるほどわからなくなる。)

否定の条件は、Base I + ないを条件形 Base I + なければにして表す。上述の肯定の条件形は大抵の初級の教科書の後半で提出されているようだが、否定の形は前半に出てくる義務を表す文型 Base I + なければならぬで先に教えることになる。

(3)命令形は、第1群動詞はBase IVのままで、第2群動詞はBase IV + ろで作れる。日本語学習者は命令の語形を言い切り、即ち文末で使うことは先ずない。むしろ引用文の中で使うことの多い語形として習得させた方がよい。(例：医者にたばこをやめろと言われた。)

3. 3. 5. Base V

Base Vは部分ではなく意向形(意志形とも呼ばれる)というまとまった語形であるが、従来の国語の文法での6活用形ではオ段の音は(五段動詞の場合)未然第2形としてア段の音と一緒に活用形扱いにされている。

(1)意向形(Base V)は第1群動詞語尾をオ段の音にして意志の助動詞うを付け、第2群動詞は語尾るを助詞ように置きかえて作る。この形はBase II + ましょう(3.3.2.(3))の普通体である。単独で、あるいは終助詞を伴って親しい者どうしの会話に使われるほか、何らかの行動をとる提案を自分自身に対して行う場合、即ち独り言を言う時にもこの語形が使われる。(例：さあ、もう帰ろう。I guess I'll go home now.)

(2)Base VはBase II + ましょうと同じく聞き手に対して提案・勧誘を行う時にも使われる。(例：時間がないからタクシーで行こう。)

(3)Base V + と思います／思っていますは話者の行動についてのつもりを表す文型である。通常平叙文では話者の意向を表し、疑問文では相手の意向を問うが、思いました／思っていたの過去時制になると、第三者の過去の意向についても表せる。(例：彼はピアニストになろうと思いました。)

3. 3. 6. Base VI て形

Base VIて形(te-form)は、gerund(動名詞)やparticiple(分詞)と名付けられている教科書もあるが、て形の用法は、これらの英語の用語が

示唆する用法と完全に一致するわけではない。gerundと名付けたために生じる誤解の一つを挙げる：私は泳いでがすきです。(I like swimming.)

動詞て形の用法は多岐にわたるが、注意すべき特徴がある。て形は時制とは関係なく存在するので、後に来る主節、あるいは、重文構造ならば最後に来る節の述語の時制がて形の時制も決定する。「デパートへ行って、靴を買います。」「デパートへ行って、靴を買った。」はどちらもて形の正しい用法であり、I went to a department storeかI will go to a department storeかは文末までわからない。又、上の例でわかるように、て形自体は発話の丁寧さに影響を与えず、主たる述語の丁寧さの度合によって、て形も含めたその文の丁寧さのレベルが決まる。

Base VIの作り方は次の通りである。第1群動詞のうちBase III辞書形が一ぶ、一む、一ぬで終わる語は飛んで、読んで、死んでのように一んでとなり、一う、一る、一つで終わる時は買って、帰って、待ってのように一ってとなり、一く、一ぐで終わる時は夫々書いて、急いでのように一いて、一いで、そして、一すで終わる語は話してのように一してとなる。第2群動詞は辞書形の語尾るをてに変えればよい。第3群動詞くるはきてに、するはしてになる。

次にBase VIて形の初級レベルに出てくる用法をあげる。

(1)て形のままの用法は二つある。くだけた会話での依頼は「ちょっと待って」や「それ取って」のように文末に動詞て形を置いて表される。これは「待って下さい」や「取って下さい」のくだけた表現である。

(2)て形のままの第2の用法は、語尾に付いているて・での接続助詞としての役目に由来するものである。2文をつなぐ場合、前の文の述語を、時制に関係なくて形に変えて後続文につなぐ。(例：福岡へ行って、友達に会います。)て形による2文接続は次のような場合に使われる：①時間的に前後がある出来事を述べる。(例：シャワーを浴びて、朝ごはんを食べます。)②前ので形動詞が、後の動詞の表す動作がどのように行われたかを表す。(例：テープを聞いて練習する。)③先行するて形動詞が後に来る

動詞の表す出来事の原因を示す。(例：風邪をひいて寝ていました。)

(3)丁寧な依頼はBase VI+くださいで表される。対になる否定依頼はBase I+ないでくださいである。Base VI+くださいは依頼の意味では時制変化がなく、又、たいていの教科書では「～をください (Please give me～)」が既出なので理解させやすく、て形の定着をはかるのに都合のよい文型である。更に丁寧に言う時には、ませんかを追加して「書いてくださいますか。(Won't you please write it ?)」とする。

(4)Base VI+からは、Base VIだけで2文を接続するより、出来事の前後関係を更に明確に示し、英語の after doing ～にあたる表現となる。(例：手紙を書いてから、寝ます。) 後件の動作が始まるのは前件の動作が起こった後なのだということが、動作や出来事の起点を示す格助詞からで示される。

(5)Base VIに補助動詞いるの付いた形は用法が本動詞の種類によって次の四種に大別される。①他動詞 Base VI+いる、継続動作を表す自動詞 Base VI+いるはいずれも動作の継続・進行を表現するのに使われる。(例：手紙を書いている。学生が歩いている。) ②瞬間的動作を表す自動詞のて形にいるが付くと、その動作の完了した状態・結果が持続していることを示す。(例：電気がついている。死んでいる。) ③状態を表す自動詞のて形にいるを付けると現在の状態を表す。(例：あの子はお父さんに似ている。道が曲がっている。) ④上記①の用法が習慣的行為や反復して行われる事柄を表すこともある。継続や進行の広義のものと考えてもよい。(例：毎週手紙を書いている。デパートで働いています。)

状態を表すにしろ進行を表すにしろ、日本語では以上のような場合は全て Base VI+いるの形になるが、英語の状態動詞は be～ing にはならないので、誤用発生のもととなる。次のような動詞は要注意である。「知っている、住んでいる、持っている」などは夫々 I know, I live, I have となる。

(6)他動詞 Base VI+あるは用途が二つある。①誰かがした動作の結果が

現在の状態としてあることを示す。この用法では動作の対象となった人・物が主語になる。(例：ドアがあけてある。) ②何か行為を前もって行い、その結果が蓄積されて保持されていることを表す。前もって何かを準備しておく場合によく使う表現である。(例：新しい単語は調べてあります。)

(7)Base VI+もは譲歩・逆接を表す節を作る。(例：雨が降っても行く。) この用法のうち主節が「いい(です)」になるのを、許可を与える文型として取り出して教えることが多い。Base VI+もいいとなる。(例：辞書を見てもいいですか。ええ、見てもいいですよ。)

(8)Base VI+はいけないは禁止を表す時に使う文型である。(例：教室でたばこを吸ってはいけません。) かなり強い禁止表現であり、日常会話では、Base I+ないでくださいが、禁止文型のかわりとしてよく使われることも指摘しておく。

(9)ある行為を他者のために行う場合に、その行為を表す動詞の Base VI に授受を表す動詞を補助動詞として付ける。話者の観点、及び誰が行為者か、そして主語が行為者か、又は行為の受け手かによって、次の3種の使い方に分けられる。①Base VI+くれる/くださる、②Base VI+やる/あげる/さしあげる、③Base VI+もらう/いただく。①と②は英語では give で表されるが、日本語で行為の受け手が話者(若しくは話者の側に立つ者)かどうかで補助動詞第2群を使い分けなければならない。事物の授受の場合と共に混乱の生じやすい項目である。更に待遇表現上の配慮によって①②③夫々のグループ内で2乃至3種の補助動詞が使い分けられるようにしなければいけない。最近日本人の間でもやるとあげるの使い方が乱れてきていることは、指摘されている通りである。

(10)Base VI+いるところだけは、その場面で言及されているもう一つの動作が起こった時点を表す。何も言及されていない場合は、現在どういう状況の最中にあるか、あるいはその時どういう状況のただ中であつたかを表す。(例：友達に手紙を書いているところへ、本人から電話がかかった。今、食事をしているところです。)

(1) Base Vは、様々な補助動詞を付けて用いられる。初級レベルでよく取り上げられるものを挙げる。①Base VI+みる。実験的に動作をして経過・結果をみようとする時に使う表現である。従って有意志の動作動詞に付く。「出来るかどうか試しに手がける」(try doing ~) という意味(例: 食べてみたが、辛くて食べられなかった。)と、「手がけて、どういう結果が出るかみる」(do ~ and see what will happen)の意味(例: 彼のうちへ行ってみたが留守だった。)の二通りの使い方がある。②Base VI+おく。ある目的のために前もって行動し、その結果を保持しておく意味を表す。(例: 来週までに調べておきます。)③Base VI+しまう。(a)有意志の動作動詞と共に使われて、その動作を完了する意味を表す。(例: 昼休みに宿題をしてしまいました。) (b)ある行為・出来事があり、その結果が元に戻せない場合に使われる。(例: 交通事故で死んでしまった。カメラをこわしてしまった。) (c)人間の無意志の動作を表す。(例: がっかりしてしまった。)④Base VI+くる。(a)ある作用が徐々に生じる・行われる場合に使われる。(例: 日本語が大分わかってきました。) (b)英語で errand mode と名付けられている用法である。英語では I will go and get it なるが、日本語では「取って来る」となる。本動詞の動作をしたあと出発地点に戻ってくることを予定する言い方である。出かける時に言う「行ってきます」はこの例である。⑤次の四つは本動詞と補助動詞が組み合わさっているという観念が稀薄で、1語の合成動詞として理解した方がいいものである: 持って行く、持って来る、連れて行く、連れて来る。

3.3.7. Base VII た形 (ta-form)

Base VIIた形 (ta-form) は、Base III辞書形が動作の未完了を表すのに対し、動作の完了を表す。文末の述語として使われる時以外は過去の時制とは直接関係がない。

Base VIIた形の作り方はBase VIて形の作り方に準じる。第1群動詞中一んでになるものは一んだに、一っては一ったに、一いてと一いでは夫々一いたといだに、そして、一しては一したとなる。第2群動詞はBase VIの

語尾のてをたに変えればよい。第3群動詞くるはきた、するはしたとなる。

次にBase VIIの用法を述べる。

(1)Base VIIの形で文末に使われた時には過去の時制を表し、Base II + ましたの普通体の言い方になる。

(2)形式名詞時が付くと、その動作が完了した時点で後に続く節の出来事が起こったことを表す。(例：今度彼に会った時にたずねてみます。)

(3)あとが付いて時の従属節を作る。主節の出来事が生じた時点で、従属節の動作が完了していることを表す。上記(2)より出来事の前後関係がはっきり表される文型である。(例：日本で研究したあと、国の大学で教えます。)

(4)Base VII + ことがあるは体験の有無を表す文型である。「北海道へ行ったことがある。」はI have been to Hokkaidoを表す。

(5)Base VII + ままは、ある動作が行われ、その結果の事態が変化せずにある状態を表す。(例：立ったままコーヒーを飲んだ。)

(6)Base VII + り + Base VII + り + するは用途が3つある。①2つの動作・作用が反復して行われる場合 (alternative actions) を表す。(例：雨が降ったりやんだりしている。It is raining off and on. 変な人が家の前を行ったり来たりしていた。A suspicious man was going back and forth in front of the house.) ②複数の主体によって、いくつかの動作が同時に行われる場合に使われる。必ずしも全部挙げる必要はなく、主な動作をいくつか挙げてよい。(例：学生達は本を読んだり、手紙を書いたり、友達と話したりしていた。Some students were reading books, some writing letters, and some talking with friends.) ③一人の動作主がある期間中に行う動作を並列的に表す。前項と同じく、動作を網羅的に列挙する必要はない。(例：週末にはレコードを聞いたり、手紙を書いたりします。On weekends, I listen to records, write letters, and do some other things.)

(7)Base VII + らは条件節を作る。既述のBase VII + ば文型と違う点を挙げ

る。①特定の因果関係を表すために使われることが多い。(例：駅に着いたら、電車はまだ来ていなかった。) ②Base VII+ばによる条件節より、主節の動作との前後関係が強調され、条件節で言及されている事柄が実現する前ではなく、実現したあとで主節の事柄が起こる、あるいは起こったという意味になる。(例：うちに帰ったら電話します。⁽²⁶⁾) ③過去あるいは現在の事実と異なる想定が表せる。(例：時間があつたら私も行ったんですが。もっと上手に日本語が話せたらいいのですが。) 以上の場合以外は、どちらの条件節を使っても意味に大差はなく、Base IV+ばの条件節の方がやや堅苦しくひびくだけである。

Base II+とによる条件節との用途の違いは既に明らかなので、ここには特に記さない。

(8)Base VIIは、以上のほか、Base IIIと同じく色々な形式名詞を伴って連体修飾節を作る。

4. おわりに

外国語としての日本語の文法のうち、初級レベルで扱ったらよいと思われる動詞文型及び動詞関連事項を取り上げ、外国人学習者に教えるにあたって、それらの文法事項を教える側がどのように捉えておくべきか、解説を試みた。日常生活を日本語でこなすには、この程度の文法知識と運用能力では不十分ではあるが、動詞に関して、大体基本的な事項は取り上げたつもりである。動詞に関連する文型・語句はこの他にも沢山あるが、その大半は本稿で扱った事柄の応用である。

又、本稿では文法上の解説にとどまり、これらの文法事項をどう教えたらよいかについては殆んど触れていない。どう教えるかは、媒介言語による説明を少しでも行うのかどうか、場面重視の教案か文型中心の教案に従うのか、又、学習者の外国語学習上の適性など、与えられた条件によって色々に変わり得る。どう教えるかを考える前に必要なのは、教える側が、無意識で身につけてきた国語としての日本語を土台にしながらも、日本語

を外国語としてあらためて習得しなおすことであろうと考え、文法の中でかなりの部分を占める動詞関連事項を、外国語の視点から検討してみたのである。

注

- (1) 本稿は、筆者が神戸YWCA及び福岡YWCAの日本語教師養成講座で担当している日本語教授法及び初級文法教育の講義の一部をもとにして書いたものである。
- (2) 受身と使役の応用範囲をどこまで広げるか、使役受身を含めるかどうか、待遇表現をどの程度扱うか等は、教科書間でかなりの差の見られる事項である。
- (3) 『日本語の基礎』(海外技術者研修協会編)、『日本語初歩』(鈴木 忍、川瀬生郎)、*An Introduction to Modern Japanese* (水谷 修、水谷信子)、*Japanese for Today* (吉田弥壽夫他)などがこの名称を用いている。
- (4) *Japanese for Beginners* (吉田弥壽夫他)、*Learn Japanese : New College Text* (John Young, Kimiko Nakajima-Okano)などはこの名称を用いている。
- (5) *Japanese : A Basic Course* (Anthony Alfonso, Kazuaki Niimi)、*Beginning Japanese* (Eleanor H. Jordan)などはこの名称を用いている。
- (6) *Modern Japanese for University Students* (Fumiko Koide)はこの名称を使っている。
- (7) *Colloquial Japanese* (Noboru Inamoto)、*Basic Japanese Course* (Naoe Naganuma)はこの名称を用いている。
- (8) 佐久間鼎『現代日本語の表現と語法』、1983(復刊第一版)、pp.77~92.
- (9) このほかに「さえぎる、限る、にぎる、蹴る、繁る、かじる、まじる、散る、照る、しくじる、ねじる」等が日常の会話に出てくるであろう。更に「煎る、覆る、よぎる、嘲る、いじる、誘る、野次る、よじる、ひねる、阿る、いびる、せびる、のめる」等があるがこれらは中・上級レベルまで待つて覚えたらよい語彙である。
- (10) 『英和中辞典』(小学館)には350語、『新コンサイス英和辞典』(三省堂)には289語が、不規則動詞として表にしてある。
- (11) 鈴木康之『日本語文法の基礎』、1977, pp.190~243 ; 寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味 II』、1984, pp.27~62.
- (12) 佐久間鼎、芳賀 綏、バーナード・ブロック、渡辺 実の活用表が、寺村上

掲書に紹介されている。この中で、ブロックの活用表は、寺村氏も指摘されるように、問題点が無いわけではないが、外国語としての日本語を教えようとする者には示唆の多い表である。

- (13) Jorden, vol. II, pp.360~61.
- (14) Yoshida, 1973, pp.370—71.
- (15) Hiroko Takeuchi, *Japanese Made Possible*, pp.279.
- (16) 前者の例は*Japanese for Today*, 『日本語の基礎』等、後者の例は、*Beginning Japanese, Learn Japanese : New College Text*等である。
- (17) *Learn Japanese : New College Text*.
- (18) 語幹という用語について文法学者の意見は色々に分かれている。語幹の認定は本稿の目的ではないので、ここでは取り上げない。
- (19) ローマ字表記に依存したために、ローマ字表記上の不規則な点を、文法における活用上の不規則形として特記するという、問題の取り違えをしているのではないかと思われる例もある。(*Nihongo no kiso : Grammatical Notes*, pp.43~44.)
- (20) 基本的な活用形を6つのbasesに分けるという活用表は*Basic Japanese Course* (長沼直兄) に採り入れられているが、この中に「た形」は入っていない。しかし、1977年出版の活用表には「た形」をBase VIIとして入れている。そして、この活用表では、それぞれのBaseに*negative, noun-forming*というような、用法を限定しすぎるとされる名称を与えている。(*Naganuma, Grammar and Glossary*, 1950, pp.174 ; *Naganuma, Ready Conjugator of the Verbs and Adjectives*, 1977.)
- (21) 文法事項の認定にあたっては、田中和美、宮崎寿子「日本語教科書における文法事項とその提示課(資料)」(『日本語教育』45号)も参考にした。
- (22) 玉村文郎「*Japanese for Today*について」(『日本語教育』59号(1986・7月)、pp.91~99.
- (23) 英語訳は、例文・語句のすべてではなく、問題のありそうなものだけに付けた。
- (24) 最近、第2群動詞も第1群動詞と同じく、「見る」を「見れる」というように変換して可能の意味を表そうという傾向が一般化しつつある。日本語関係者の中にも、いずれは「見られる」より「見れる」の方が一般的になると考える人が少なくない。しかし、当分は日本語学習者は「見れる」は聞いた時に分かればよく、自分達が話す時には「見られる」が使いこなせたら十分だと筆者は考えている。
- (25) 条件を表すたらしについては、42頁を参照。
- (26) この例文は、「うちに帰るのは確かである。だから帰り着いたら電話する」

という意味になるが、「うちに帰れば電話します」は「うちに帰るかどうかわからぬが、もし帰ったら電話する」という意味になる。

参考文献

- Alfonso, Anthony & Niimi, Kazuaki, *Japanese : A Basic Course*. Sophia University Press, 1975.
- Inamoto, Noboru. *Colloquial Japanese : with Important Constructions and Grammar Notes*. Tuttle, 1972.
- Jorden, Eleanor H. *Beginning Japanese, 1 & 2*. Yale University Press, 1962 (vol. 1), 1963 (vol. 2)。
- 海外技術者研修協会編『日本語の基礎 I』海外技術者研修協会、1972。
- 海外技術者研修協会編 *Nihongo no kiso : Grammatical Notes*. 海外技術者研修協会、1975。
- Koide, Fumiko. *Modern Japanese for University Students, Part I*. International Christian University Press, 1979.
- Mizutani, Osamu & Mizutani, Nobuko. *An Introduction to Modern Japanese*. Japan Times, 1977.
- Naganuma, Naoe. *Basic Japanese Course*. 長風社、1950.
- Naganuma, Naoe. *Grammar and Glossary, accompanying Naganuma's Basic Japanese Course*. 開拓社、1966.
- Naganuma, Naoe. *Ready Conjugator of the Verbs and Adjectives*. 長風社、1977.
- 佐久間 鼎『現代日本語の表現と語法』くろしお出版、1983 (復刻第一版)
- 鈴木 忍、川瀬生郎『日本語初歩』国際交流基金、1982。
- 鈴木康之『日本語文法の基礎』三省堂、1977。
- Takeuchi, Hiroko. *Japanese Made Possible*. 凡人社、1982。
- 玉村文郎「Japanese for Todayについて」『日本語教育』59号 (1986. 7), pp.91~99.
- 田中和美、宮崎寿子「日本語教科書における文法事項とその提示課 (資料)」『日本語教育』45号 (1981. 10), pp.171~185.
- 寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版、1984。
- 吉田弥寿夫他編、*Japanese for Today*. 学研、1973。
- 吉田弥寿夫他編、*Japanese for Beginners*. 学研、1976。
- Young, John and Nakajima-Okano, Kimiko. *Learn Japanese : New College Text, vol I*. University of Hawaii Press, 1984.